自治体における社会教育諸施設の組織的連携の可能性

―〈外なる〉トライアングルの事例としての長野県における MLA 連携を題材として―

藤本　朱音（広瀬ゼミナール）
HS19-1019B

論文の目次

論文の要約
１ はじめに
２ 本稿の目的
３ 先行研究
3-1 大学における MLA 連携の実現
3-2 自治体における MLA 複合施設
3-3 MLA 連携の 2 つのトライアングル
４ 方法
4-1 調査対象と調査方法
4-2 インタビュー調査質問項目
５ 結果
5-1 長野県における MLA 連携の取り組み
5-2 前史「信州デジくら」とそれぞれの活動
5-3 土台となる館長同士のつながり
5-4 信州における MLA 連携の課題と各館の強み
5-5 現場における人的なつながりの構築
5-6 電子情報の共有化に対する困難
5-7 長野県においていかにして MLA 連携が実現されたのか
６ 考察
6-1 自治体における〈外なる〉トライアングルはいかにして実現されたのか
6-2 自治体における社会教育諸施設の組織的連携の可能性
6-3 2 種類の人的なネットワークの構築の必要性
おわりに
謝辞
引用文献
付録
１．インタビュー調査質問項目

論文の要旨

１本稿の目的

社会教育は学校教育外で組織・援助される人々が自己教育を行う学習活動であり，生涯学習に含まれる営みのことである．人々の学習活動の支援のために連携が求められており，博物館，図書館，文書館の連携である MLA 連携と協働の可能性がある．MLA 連携の実現化に関して安達(2010)は大学図書館・大学博物館連携について，組織そして施設で同一構造になっていることが望ましく，いかにして組織的連携を構築するかが焦点だと指摘している．

本稿では安達(2010)が指摘する組織そして施設で同一構造になっていることが望ましく，組織的連携の構築が焦点だとする理論が自治体における MLA 連携の実現化においても適応可能かを検証することを目的とする．

２先行研究と方法

安達(2010)が指摘する組織そして施設で同一構造になっていることが望ましく，組織的連携の構築が焦点だとする理論は，水谷(2011)が指摘する 2 つの MLA 連携の内，一つの館内に存在する〈内なる〉トライアングルにおいて適応可能だと確認された．一方，異なる組織・機関としての館同士の〈外なる〉トライアングルにも適応可能かという課題が発生した．(水谷 2011)

そこで本稿では，〈外なる〉トライアングルの

形をとる長野県の MLA 連携を題材として，資料収集とインタビュー調査を行い，いかにして実現したのかを明らかにし，いかにして組織的連携が構築されたのかを考察する．

３結果

本節では大学と自治体において独立して設置された組織・施設が連携している長野県における MLA 連携がいかに実現したのかをまとめる．

長野県における MLA 連携の前史として，運用困難なデジタルアーカイブや各組織での独自の取り組みが存在しており，MLA 連携の推進の土台となったのが館長同士の人的ネットワークである．課題として「① 電子情報の共有化と新たな発信の展開」，「② ①に伴う新たな人材育成」を設定したが，電子情報の共有も人材育成も準備が出来ておらず，構想が必要であった．現場における人的なつながりに関しては，交流研修やフォーラムによって構築され，現在では取り組みの意義の理解や話しやすさが存在している．2020 年には「信州ナレッジスクエア」がリリースされ，電子情報の共有化と提供が進んでいる．

４考察

本節では大学図書館・大学博物館連携の実現において，組織そして施設で同一構造になっていることが望ましく，いかにして組織的連携を構築するかが焦点だとする安達(2010)の理論を，自治体における〈外なる〉トライアングルの事例としての長野県における MLA 連携から検証し，考察する．

第一に，連携の障害の克服について考察する．安達(2010)は，連携の障害である組織・機関間の壁の高さの解消には組織・施設の同一構造化が鍵であるとしたが，長野県における MLA 連携では組織的連携としての人的ネットワークの構築があると考える．第二に，促進要因について，〈内なる〉トライアングルを対象とした安達(2010)では組織・施設の同一構造化が促進要因であったと考えられるが，〈外なる〉トライアングルの事例である長野県における MLA 連携では，推進の土台である館長同士の人的ネットワークが促進要因であったと考えられる．長野県の MLA 連携における組織的連携としての人的ネットワークの構築を整理すると，長野県における MLA 連携は館長同士の人的なつながりの構築をきっかけに実現し，フォーラムや研修によって連携しあう機関について互いに知ることで現場の人的なつながりの構築がされている．

以上より，MLA 連携の実現に関して，安達(2010)が指摘する組織そして施設で同一構造になっていることが望ましく，組織的連携の構築が焦点だとする理論は，〈外なる〉トライアングルの事例に関しては，組織的連携の構築という点において，きっかけのための人的ネットワークと，連携する機関のことを知るための人的ネットワークの 2 種類の人的なネットワークの構築が必要だと考える．

おわりに

本稿では，〈外なる〉トライアングルの事例として長野県における MLA 連携を対象とした．しかし，安達(2010)が設定した想定される連携の「目録(データ)の連携・統合」，「展示(現物・デジタル)の連携」，「組織(人・施設)の連携」のうち，対象事例では「展示(現物・デジタル)の連携」は実施されていない．よって，「展示(現物・デジタル)の連携」の要素によっては，自治体において独立して設置された社会教育諸組織・施設の連携に現れる推進要因が異なる可能性もあり，今後の研究課題となるだろう．

主要参考文献

安達匠(2010)「人文系資料を対象とした大学図書館・大学博物館連携」，『アート・ドキュメンテーション研究』，第 17 巻，pp. 3-17.

水谷長志(2011)「MLA 連携のフィロソフィー:″連続と侵犯″という(〈特集〉図書館にできること:周辺との連携を中心に)」，『情報の科学と技術』，第 61 巻，第 6 号，pp. 216-221.